公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団主催

第12回環境シンポジウム

基調講演② 「脱炭素先行地域・生駒市におけるカーボンニュートラル実現と歩いていけるまちづくり」

奈良県生駒市は大阪のベッドタウンとして発展してきた人口約12万人の基礎自治体です。今回は、脱炭素とまちづくりを掛け合わせた生駒市独自の取り組みを紹介します。脱炭素化は待ったなしの状況ですが、環境政策の視点だけで脱炭素化を図ろうとしてもなかなかうまく進みません。住民が楽しみながら活動しているうちに自然な流れで脱炭素化が進むようにすることが肝要です。

そこで生駒市が取り組んでいるのが、自宅のすぐ近くで「あったらいいな」をかなえる複合型コミュニティーづくりです。生駒市版「まちのえき」と名付けて現在、12自治会14拠点でさまざまな取り組みを進めています。毎週1回、自治会館でボランティアによって開催している、100歳体操と名付けた健康体操教室に合わせて、スーパーの移動販売車やキッチンカーを誘致して、主に高齢者に買い物をしてもらったり、食事を楽しんでもらったりしています。

また、自宅で不要になった本や漫画、食器や雑貨を寄贈してもらうことで自治会館でのミニ図書館の開設やリユース市につなげています。ボランティアによる子供たちを対象にした夏休みの宿題教室や農園の開設など地域によってさまざまな取り組みが生まれています。

「まちのえき」の必要性を感じたきっかけは、地域の急速な高齢化がもたらす影響を実感したことでした。数年前に多くの高齢者が抱えていた安否の主な対象は認知症だったのですが、近年は変化しています。高齢者への運転免許証返納の社会的要請が広がったことを受けて、買い物や通院に必要な移動手段確保への不安が高まっています。しかし、バス路線の維持やライドシェアといった交通手段の確保には限界があります。そこで、発想を変えて、高齢者が歩いて行ける場所に生活機能を備え、コミュニケーションの拠点となる場所を作ることが課題解決の近道につながると考えました。

「まちのえき」は、住民だけでなく、行政、企業が連携して人が集まりたくなる楽しい場所を作ることで、地域社会を支えるインフラとする取り組みです。キッチンカーなど移動販売への創業支援を通じて地域経済の活性化にもつなげたいと思っています。

生駒市はウェルビーイング実現の取り組みにも力を入れています。第6回地域共生社会推進全国サミットを誘致し、10月11日、12日に市内で開催しました。誰一人取り残さないだけでなく、誰一人として単なるお客さまにすることなく、何らかの役割を持って活動してもらうことが公園でまず重要です。生駒市の自治会部や公園では、市民一人一人が役割を持って運動、買い物、飲食、読書、学習、創作、遊び、農業、育み、仕事、見守りといったさまざまな活動を行っています。

地域を楽しみ、地産地消を進めれば、遠くに車で買い物に行く必要もないので、環境は良くなり、SDGs、持続可能な開発目標の具体化でもあります。楽しく人が集まる場所を作ることで、地域課題を自然な流れで解決していきたい。「まちのえき」を地域課題解決のモデルとして活用していただけるよう情報発信にも力を入れていきたいと考えています。

奈良県生駒市長
小紫 雅史氏

複合型コミュニティー「まちのえき」を推進 市民一人一人が楽しみながら活動し、役割を担うまちづくり

パネルディスカッション

ウェルビーイング社会 わくわくする要素が必要

趣旨説明 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 名誉教授
(財団環境事業選考委員長) 阿部 健一氏

現状のまま推移すると地球環境は危機的な状況になることがさまざまなデータから報告されています。地球環境問題は、対症療法的に解決しようとするだけでは十分ありません。新たな社会を作ること、未来に向けて豊かな社会を作ることを目指さなければなりません。今回のシンポジウムは、ウェルビーイングをテーマにしています。環境保全とウェルビーイングを実現するには、先を見通した広いビジョンのもとで地域に密着し、小さな取り組みをつないでいかなければなりません。ビジョンを策定する上で必要になるのが、アート(芸術)とナラティブ(物語)の力です。

また、地域での取り組みを進めるには行政が大きな役割を担っています。その一方で、地域の未来は、住民たち自身が楽しいと思いながらやらないことは言うまでもありません。アートが共感を生み出す上でどれだけ大きな役割を担っているか。この点についても探っていきたいと考えています。

阿部 ウェルビーイングとアートの関わり方を中心に皆さんから意見をうかがいたいと思っています。最初に、小紫市長にお聞きしたいのですが、地方自治体を運営するにあたり、アートはどのような役割を果たしているのでしょうか。

小紫 生駒市では市民の文化活動が非常に活発です。多くの市民が自治会館を自らの作品発表の場として活用し、全国レベルの市民吹奏楽団も活動しています。市民のウェルビーイングにつながる施策を実施するにあたり、市民の声を直接聞き、もちろんデータやエビデンスも重視しながら、最終的には自らの価値観に基づいて判断しています。政治家は結果が出なければ選挙で有権者の審判を受けます。変化が激しく、正解を見つけることが難しい今の時代に必要な判断力を養うには、論理的思考だけでなくアート思考も大事にしなければならないと思っています。

阿部 地方自治体だけでなく、世界の政治、経済のリーダーもアートを学ぶ必要があると思うのですが、長谷川さん、いかがでしょう。

長谷川 欧米の国々のリーダーは総じて、いくら経済力が強く、インフラが発達している国の出身者でも文化に対する知見が乏しいと判断したら場合、その人間を対等の相手とみなさない風潮があります。アートは世界中のリーダーにとって必要不可欠の分野といえるでしょう。

阿部 ウェルビーイングな生活を送る上での動物園の役割について、冨澤さん、一言お願いします。

冨澤 動物園は、あらゆる人のための施設です。動物の行動はインスピレーションを与えてくれることがあります。園内で動物の行動を何気なく見ていると、新しい発想が湧いてくることがあります。一緒に動物園を訪れた人の性格やお人柄を、動物への接し方から推し量ることも可能です。何かに行き詰まり、悩むことがあったときには、ぜひ、動物園に足をお運びください。

阿部 大牟田市動物園内で2021年秋に絵本美術館がオープンしましたが、どのような効果が生まれているのですか。

冨澤 絵本美術館は大牟田市出身の絵本作家、内田麟太郎さんの作品の原画を収蔵し、動物園内の美術館ならではの企画展などを開催しています。動物とアートの親和性が高いと考えられることから、様々な美術館との連携を、これからも進めていきたいと考えています。

阿部 アートがまちづくりに果たす役割について長谷川さん、小紫さんはどう考えますか。

長谷川 今年秋に岡山県内12の市町村を会場に開かれた国際芸術祭「森の芸術祭 晴れの国・岡山」でアートディレクターを務めさせていただいたのですが、アートの力によって地域の魅力を引き出すことが、住民のシビックプライド(都市に対する民間の誇り)を醸成することを改めて実感しました。会場には2019年に出生率2・95を記録し、奇跡の町といわれている奈義町も含まれているのですが、奈義町は、こども園など子育てのための施設を充実させているなどアートにも力を入れています。地域全体で子供を育む仕組みづくりとアートを重視する姿勢が、相乗効果を発揮しているように思います。

小紫 環境政策と同様に福祉政策を福祉の面で進めてもうまくいかないことを、生駒市のアーティストから教わりました。彼は、孤独や貧困といった環境にある子供たちを地域みんなで支える駄菓子屋、チロル堂を市内で運営しています。食堂や酒場を併設して訪れた大人が楽しみながら気軽に寄付を行い、子供たちを支える仕組みを作っています。この駄菓子屋は福祉の色が見えず、自然な形でみんな楽しみながら必要な子供の支援に繋がっています。これから先、市内で市民の居場所となる面白い場所を作る上でアートやデザイン、動物園の活用は鍵になります。

阿部 福祉の視点から大牟田市立動物園で取り組んでいることはありますか。

冨澤 動物園をオンラインで楽しんでいただく「どうぶつえん ひとりじめ」というサービスを、さまざまな理由で来園が難しい方々に、お届けしています。また、動物を表彰手話に関するライブ配信をするなど、どのような方にも楽しんでいただける動物園を目指していきたいと考えています。

阿部 脱炭素化を進め、ウェルビーイングな環境を作っていくにはわくわくする要素が重要ということがよくわかりました。本日はさまざまな視点からの貴重なお話、ありがとうございました。

先行き不透明な時代にはアート思考も重要

主催 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団
共催 大阪府、大阪市、関西経済連合会(アジアビジネス創出プラットフォーム)、大阪商工会議所、大阪産業局
後援 日本貿易振興機構(ジェトロ)大阪本部、JICA関西、関西SDGsプラットフォーム、2025年日本国際博覧会協会、産経新聞大阪本社、りそな銀行、関西みらい銀行、みなと銀行、りそな総合研究所

第12回環境シンポジウムの模様は、りそなアジア・オセアニア財団YouTubeチャンネルでご覧になれます。

<企画・制作>産経新聞社メディアビジネス局